

氏名 工藤秀明
 学位(専攻分野) 博士(経済学)
 学位記番号 論経博第223号
 学位授与の日付 平成10年7月23日
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
 学位論文題目 原・経済学批判と自然主義
 — 経済学史と自然認識 —

論文調査委員 (主査)
 教授 八木紀一郎 教授 田中秀夫 助教授 宇仁宏幸

論文内容の要旨

本論文は、完全な形では残されていないこともあってこれまで統一的な像を得ることが困難とされてきた初期マルクスの2著作—1841年の『デモクリトスとエピクロスらの自然哲学の差異』と1844年の『経済学・哲学草稿』—を、「自然認識」という視点から読み解こうとしたものである。

まず、序章「自然—人間関係の〈自然主義〉的理解」は、客観的な自然研究にたつデモクリトスの唯物論に対して、原子論からの自然界の構成という点では共通するエピクロスに「自己意識の自然学」を見た『差異』論文をとりあげる。学位請求者は、エピクロスの「抽象的な個別的自己意識」の立場へのマルクスの批判的留保に、(1)自然と人間の両者一体性、(2)人間の自然の内部的存在性、(3)人間は自然の主体性を分有し、共有表現するという、自然—人間関係についての基本理解を読み取っている。

序章での「基本理解」の確認をもとに、本論文は、1844年のマルクスの最初の経済学批判の作業成果の解説に向かう。各章のタイトルは次のようになっていて、それぞれ副題によってテキストの分析対象が示されている。

- 第1章「経済学批判体系化の第一次試行：『経哲』第一草稿の全容」
- 第2章「経済学批判体系化の始源指定：『ミル評注』の人間的(=自然的)生産」
- 第3章「経済学批判体系化の終結部：『経哲』第二草稿と第三草稿との関連」
- 第4章「自然の真の復活としてのゲゼルシャフト：『経哲』第三草稿の全容」
- 第5章「世界史の概念的把握と〈自然主義〉：『経哲』第三草稿のヘーゲル弁証法批判」

第1章は、労賃、利潤、地代という労働者、資本家、地主の近代3階級の所得の性質と変動の分析から「疎外された労働」の分析にいたる第一草稿の解説である。マルクスはこの草稿の前半部では、スミスやセイからの引用にコメントを付していくなかで、労賃・利潤・地代の三所得のうちの前者と後二者が敵対関係に立つことを明らかにし、競争と集中の過程のなかで資本・土地所有の合体した少数の有産階級と多数の無産労働者階級の対立という「傾向的極限像」が析出する。これが、根本前提としての私的所有を問い直す課題を問題として浮上させ、労働の疎外によって私的所有を解明する後半部につながる。学位請求者は、この行程を、三所得が同一ページに欄を分けて並列して書きすめられた前半部についてはその配置図を作成し、また後半部については全パラグラフに番号をうって、その論理展開を図示して、詳細な分析をおこなっている。学位請求者はこの第一草稿の「限界」を認めているが、「類の本質の疎外」(疎外された労働の第3規定)および「人間からの人間の疎外」(同第4規定)の認識を基礎に人々の「相互的諸関係態様の総和」としての「人間的(=自然的)社会」の現実化を展望することを可能にしていると論じている。

第2章は、貨幣を「交換の媒介者」とするJ.ミルの規定に触発されて開始された『ミル評注』のなかに、その内容的脈絡をさぐっている。そこでは、第一草稿の疎外された労働の第4規定(人間関係の疎外)に連続させて、貨幣を「疎外されたゲマインヴェーゼン」であるという規定を解釈する。貨幣は私的所有、営利労働、分業のもとでのゲマインヴェーゼンで

あるが、経済活動の利己的な欲求・生産・交換という認識は、それを陰画として反転させた陽画としての「人間的」＝「社会的生産」の認識（「自由な生命発現」としての、人間的な欲求・生産・交換）を生み出し、彼の経済学批判の体系化の始源になると論じられる。

第3章は僅か4ページしか残されていない第2草稿の考察であるが、学位請求者はそこにはすでに、交換－再生産論を経た上で成立する私的所有の分配＝領有論的な認識が現れているとする。

第三草稿は、コミュニズム論や欲求論を社会論（ゲゼルシャフト論）として解釈した第4章と、ヘーゲル弁証法の批判を「世界史の概念的把握」に結びつけた第5章の2章でとりあげられる。第4章では、失われた第二草稿への三つの『付論』として執筆されたことから来る錯綜した草稿の記述を整理しながら、私的所有の主体的本質としての労働の経済学内部での認識の進展、私的所有の対立に発する自己疎外の止場運動としてのコミュニズム論とともに、「完成された自然主義＝人間主義」としての「人間的社會」が、人間関係が相互に手段の体系とみなされる「市民的社會」の目的・手段関係の倒錯の止場の目標として現れることを論じる。

引き続き第5章では、従来この草稿のなかでも異質の部分であるかのように取り扱われてきた「ヘーゲル弁証法と哲学一般の批判」を、「自然における自然の中からの人間の産出」という立場からのヘーゲル批判として考察している。ヘーゲルにおいて自然は抽象的自己意識にとっての「外化」としてしかあらわれず、したがってその止場も抽象的な理念としてしか現れないが、マルクスはこの弁証法のなかに自然の中での人間的・自然的主体の形成を論じている。いいかえれば、人間主義＝自然主義というのは、1844年のマルクスの「原・経済学批判」の基調であり、世界史の概念的把握と結びついた総括でもある。

終章「二つの処女作品とその後の研究行程」では、前5章の対象としたテキスト群をふりかえるとともに、そこで獲得された「自然主義＝人間主義」という視座が、『資本論』に結実する後年の経済学批判にも通底するエレメントになるという見方が披瀝される。

付論「経済学史と自然認識」は、環境問題・環境思想が経済学史上でどのようにあらわれてきたかを、マルクスに限定せずに概観したものである。

論文審査の結果の要旨

マルクスが1844年にパリで執筆し、1932年に初めて公表されたいわゆる『経済学・哲学草稿』は、とくにその中心をなしたと想定される第二草稿の大部分が失われていることもあって、その論旨の統一的把握が困難とされてきた。また、それに3年先立って、青年ヘーゲル派の内部にあったマルクスが学位論文として執筆した『デモクリトスとエピクロスらの自然哲学の差異』についても、これまた残存テキストの不完全さにもなる同様の問題が存在している。本論文は、経済学批判における自然認識という視点を据え、詳細なテキスト分析をおこなって初期マルクスのこの二著作を読み解き、そこに後年『資本論』に結実する経済学研究に受け継がれる基礎的な人間・自然観が存在することを論じたものである。

1960年代後半のマルクス・ルネッサンス以降、初期マルクスの読解の試みはしばしば行われているが、これまでは、哲学や思想に関心が向いた読解と、最初の経済学批判としての読解が分裂する傾向が見られた。それはテキスト自体に根拠があることで、本論文が対象としたテキストでいえば、1841年の学位論文や『経済学・哲学草稿』第三草稿中の「ヘーゲル弁証法および哲学一般の批判」は、通常の経済学史研究者が敬遠したくなるような哲学領域での議論が主であり、それに対して、同第一草稿の前半部や同時期の『ミル評注』などは同時代の経済学文献からの引用で埋め尽くされていて、これまた哲学出身の研究者には近づきがたいものであった。本論文は、マルクスの経済学批判の基礎には、人間は自然内部の存在であり、自然の主体性を分有して社会を形成しているのだという「人間主義＝自然主義」の自然観があることによって、この両極分解の傾向を克服した読解を提示したものである。また、パラグラフにナンバーを打って論述を再構成するなどのテキスト分析の徹底度も賞賛に値する。

1841年学位論文の読解のなかでは、1841年のマルクスをエピクロス哲学の単なる再構成者としてみなすのではなく、エピクロスの「抽象的な個別的自己意識」の立場に対するマルクスの留保的な文言のなかに「自然内的な人間存在」についてのマルクスの原認識を析出している。これは、難解かつ断片的なテキストにともかく一貫した像を与える見解であり、また、

この時期の「自然＝人間認識」を通じて、3年後のヘーゲル批判に向かう時期のマルクスとの接続をも示している点で魅力ある見解である。ただし、後のマルクスとの連続関係だけでなく、当時の青年ヘーゲル派やヘーゲルその人の自然哲学との関連づけてマルクスの視点を位置づけることも必要であろう。

第一草稿前半において、労賃、資本の利潤、地代と3つの欄に分けて並行的に書き進められるなかで、相互の利害の融合・対立関係と集積・競争の帰結が見えてきて根本前提としての「私的所有」の問い直しにいたるというテキスト分析はこの種の草稿の解読作業の模範例にもなりうるような出来である。後半の「疎外された労働」の解釈では、「類の本質の疎外」を疎外の第3規定、「人間からの人間の疎外」を第4規定とする解釈を取っている。学位請求者は、経済学批判の諸範疇を「疎外された労働」の分析から直接導出することは困難で、第一草稿は経済学批判の「第一次試行」であるという見解をとっているが、上述の第4規定は、自然内存在としての人間観と結びついて、『ミル評注』や第二、第三草稿の経済学批判の基礎になっていると主張している。「第一次試行」が逢着した「困難」がどう打開されたかは、第二草稿の見失われた部分の内容把握にかかわるので研究者としては慎重にならざるをえないのであろうが、この点はいま少し明解に論じて欲しかった。

第三草稿が、ヘーゲルの弁証法や哲学を扱った部分も含めて、1844年のマルクスの理論的作業を「自然主義＝人間主義」の立場から総括したものだという主張は、初期マルクス（『ドイツ・イデオロギー』以前）に対する統一的理解を与えうる有力な見解として評価できる。学位請求者は、この視点が「人間と大地との物質代謝を、社会的生産の規制的法則として、また十分な人間的発展にふさわしい形態で、体系的に再建する」ことを『資本論』で要求したマルクスにも受け継がれていることを主張する。しかし、この点については、ヘーゲル哲学の枠内、あるいはその批判的克服の途上での思想表現の延長線上に1850年代以降のマルクスを考えることの問題点がある。

本論文の主たる貢献と審査委員のなお残る要望点を上記に述べたが、要望点のほとんどは学位請求者の論文執筆にあたっての自己限定に基づくものであって、本論文の学術的価値を低めるものではない。学位請求者が本論文のようなマルクス解釈を出発点にして、広く全般にわたる経済学史・経済思想史のなかでの自然認識を問題として掲げて、研究および翻訳の活動を続けていることについては、その一端が付論で示されている。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成10年5月15日、論文内容と、それに関連した試問を行った結果合格と認めた。